座談会

旅の風光を語る

6

株式会社ＪＴＢパブリッシング　執行役員　**楓　千里**

立命館アジア太平洋大学　非常勤講師
元・公益財団法人日本交通公社　常務理事　**林　清**

株式会社ＪＴＢ総合研究所　代表取締役社長
前・株式会社ジェイティービー　代表取締役専務　**日比野　健**

公益財団法人日本交通公社　会長　**志賀　典人**

公益財団法人日本交通公社　理事・観光文化研究部長　**寺崎　竜雄**（進行役）

写真集『美しき日本　旅の風光』発刊の意義、日本の国内外の多くの方々にどのように写真集をご覧いただきたいか、何を感じ読み取っていただきたいか、あるいは写真集に表現した日本の美しさについて、岩手県宮古市浄土ヶ浜の美しい景色を背景に観光資源評価委員会委員に語っていただきました。

寺崎　いま散策いただいた浄土ヶ浜は、『美しき日本　旅の風光』ではA級にランクされた観光資源です。訪れた印象はいかがでしたか。

楓　盛岡から延々と山道を経て、私たちはこの地にたどり着きました。昔の人たちもようやく海岸に出てこの風景を見たわけで、そのときのインパクトが今もなお古びていないと思います。この自然の造形力を目の当たりにしたときに、人間ではなし得ないものの大きさを感じましたね。

林　全国的に有名な景観ですが、これだけ美しくまとまった海のある風景は三陸海岸の中でもほかにありません。ただ、ここは海水浴場でもあるんですね。景観を守るという観点から、見るところと遊ぶところは別にした方がいい。こういう希少な場所は、なるべく景観や雰囲気を大事にすることに徹してほしいと思いました。

日比野　この場所に「浄土」という名を付けたのは人間ですよね。先ほど案内していただいたときに由来を聞きましたが、そのネーミングの力とイマジネーションが素晴らしいと感じました。風景が美しいだけでなく、人の営みや現代性も生きているいい場所だと思います。

志賀　ここの素晴らしさは、やはり光ですよね。岩の白さが印象的ですが、単に白いだけではなく、海と光の関係によって見え方が変わり、刻々と風景が変化することが魅力だと思います。

風景を見つめ直す

寺崎　浄土ヶ浜を含め、日本の数多くの観光資源の評価に関わっていただきました。その成果の一つが、『美しき日本　旅の風光』です。この本のどのようなところに注目いただきたいか、お聞かせください。

楓　冊子の制作者サイドとして写真のクオリティにはかなりこだわりました。例えばお祭りは躍動感があり、音が聞こえてくるような写真を選んでいます。また、特Ａクラスの観光資源については一枚の写真だけではなく、広角の写真とアップの写真を組み合わせて、資源の素晴らしさを表現するようにしました。

窓越しに浄土ヶ浜を望む座談会会場

修学院離宮庭園は庭園だけでなく、造営時から残る田畑の写真も入れたり、「小笠原の見送り」もワンシーンだけではなく、港を異なる視点から撮った写真を入れるなど、資源が立体的に見えるような工夫をしています。

寺崎　どういう方にこの本を見ていただきたいですか。

楓　やはりまず外国の方ですね。また国内では、中学から大学までの学生の方に「日本ってこんな良さがあるんだよ」ということを、英語の勉強も兼ねて知ってもらえたらいいなと思います。彼らはインターネットを通じ、断片的にいろいろな情報を得ていると思いますが、日本には北から南までこんなに多彩な自然や文化があることを、トータルで受けとめてもらえるとうれしいですね。

寺崎　この本の発行を発案された立場からはいかがでしょうか。

志賀　一九七二年（昭和四十七年）に作られた観光資源台帳（特集2・特集3参照）をどのように改訂していくか、また、一定の客観性を持った形で評価した資源を社会にどうフィードバックしていくかという議論からこの本が生まれました。

口コミなどの利用者目線や一時的な感覚を重視して評価するのも一つの方法だと思いますが、この本で掲載した特A級・A級資源は、知識や学識を蓄積された研究者、観光の実務を積み重ねた方々が、観光資源の価値や見方を体系的に議論し、評価した結果です。これだけ多くの専門家の方たちがいろんな議論をしながら突き詰めてリストアップされたものはなかなかないと思います。

そういう意味では、外国の方はもちろん、日本のこれからの観光を考える方や日本を知りたいという若い人たちに対しても、いいメッセージになるのではないかと思います。

寺崎　観光分野で実務や研究を積み上げたいわゆる「目利き」が議論して、日本代表を集めたということですね。

志賀　もちろん人文科学的な評価ですから、個人的な感性や何らかの思いが入ることは事実だと思いますが、学術的経験を積み上げてきた専門家の皆さんが評価しているという

意味で、一定の客観性を持った評価だと思います。

寺崎　林さんは『美しき日本』（一九九九年版）に引き続き、今回も評価から制作まで関わっていただきました。この本はどのような点が特徴だと思いますか。

林　自然資源は、目に入る景観そのものを評価するという点において結構分かりやすく、客観的な評価もしやすいんですね。しかし、人文資源の評価というのは、視覚だけではなく、その背景にある歴史的なことや、人が織りなした物語までが価値となるのでなかなか難しいのです。前回の写真集、『美しき日本』にはなかった新しいカテゴリーとして、「温泉」や「食」などを加えました。これらについては随分と検討し、あえて、難しいことに足を踏み込んでみました。多くの観光資源を実際に見てきた専門家の議論の成果を見てほしいですね。深田久弥の『日本百名山』は、選定に基準を明示しています。なぜそういう評価に至ったか、どういうところを重点的に見て評価したか、理由や根拠をきちんと示すことが重要だと思います。この冊子には、一つ一つそれらを記述していませんが、選定の過程ではそのようなことを丁寧に話し合いました。

日比野　こうして一冊の本にできあがったものを見ると、日本の自然に育まれた日本人の考え方や生活、気質みたいなものが浮かび上がってくるように感じました。食文化やお祭りもそうですし、宗教や社会習慣など、人の営みに自然資源が重なっていることが、うまく表現できたのではないかと思います。

　この本を作る動機の一つに、外国人に日本の良さを知ってもらうことがありましたが、結果的には我々自身が日本はこういうものだと感覚的に理解できるものになったと思います。外国人だけでなく日本人にとっても、もう一度風景を見つめ直すいいきっかけになると思います。

「静」と「動」

寺崎　今お話に出たようなことは、『美しき日本　旅の風光』の例えばどの観光資源に表現されているのでしょうか。具体的にお聞かせください。

楓　私は瀬戸内海の多島景観ですね。先日亡くなられた作家の渡辺淳一さんが瀬戸内海を「微温的な風景」とおっしゃっています。「優しい」「穏やか」など瀬戸内海を表す表現はいろいろありますが、この言葉が非常にぴったりくる写真だと思います。

　瀬戸内地域では、気持ちのゆったりした方にお会いする機会が多くあります。こういう風景を見ながら過ごすと、心の持ち方や人生観も自然と風景に沿うようになるのではないか、そういうことを一番表している写真だと思いました。

楓千里委員

志賀　私は日本的な渓流、渓谷という意味で奥入瀬渓流ですね。日本庭園にも通じる美しさがあり、箱庭的な日本の自然を表していると思います。渓流に沿って、ゆっくり歩くことで変わっていく川の表情を楽しめますし、本に掲載されている紅葉

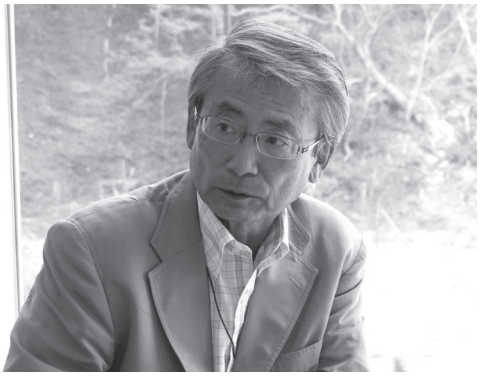
奥入瀬渓流

の写真もいいですが、四季によっていろんな表情を見せます。小さいけれど、あらゆるものが表現されているのが奥入瀬渓流で、極めて日本的な景観だと思います。

寺崎　今日の浄土ヶ浜も、額縁の中におさまるような空間に、一言では表現できない多面的な魅力がありますね。

志賀　海外にはもっとダイナミックな風景がいくつもあり、スケールではとてもかないませんが、奥入瀬渓流や浄土ヶ浜には、それらとは全く違う日本の風景の良さがあると思います。

林　私が好きなのは山の写真です。大雪山と苗場山はとても良い写真を選んだと思います。大雪山は旭岳だけでなく裏側の写真も掲載していますが、なかなかこういう写真は見ないですよね。これまで山の評価は、外から見た山の形、山容を主に評価対象としていましたが、今回は山を歩くときの雰囲気も意識しています。その点で、大雪の雄大さに抱かれて、そこに居るときの素晴らしさが伝わるように表現できていると思います。


林清委員

苗場山の湿原も、本当の素晴らしさはそこに立ってみなければ分からないのですが、そのイメージは伝わったのではないでしょうか。人文資源以外では高野山がいいですね。写真で奥の院の雰囲気を伝えるのは難しいのですが、行ってみたいという気持ちが湧いてくると思います。

日比野　私があえてこだわったのは原宿です。今の日本の若者たちの明るさや時代性を提示しています。ロジカルで整然とした欧米流の考え方ではなく一種猥雑（わいざつ）な、ここから何か新しいものが生まれてくるという息吹を感じますね。奥深い日本の自然とは対極にある、今の若い人たちのエネルギーの在所です。

日本の自然や文化を背景にして、こういう人たちの、いわゆるサブカルチャーが前面に出てきているんですよね。深い森も意識しながら、一方でこういう明るさもある。日本の自然、文化、歴史、宗教も内包しつつ、明るくやっていくんだということが感じられます。そういう意味で外国の人も楽しめるし、現代の日本をよく表している写真だと思います。

志賀　議論として非常に難しかったのが、食や祭り、温泉などにどういう評価軸を置くかということでしたね。原宿同様、大阪の道頓堀や銀座、歌舞伎町といった街をどう評価するかといった議論もかなり活発に行いました。いずれも今の日本を表す観光資源として非常に重要な意味を持つと思いますが、それをどう位置づけるかというのは非常に難しかった。

楓　築地市場も、市場で働く人の生き生きとした姿を写真で表現できたのはよかったと思います。築地市場というと魚が並んでいて観光客が見ているという写真が定番ですが、築地は本来働く場であり、魚が並んでいる観光地ではないことが伝わると思います。

寺崎　絵に動きがありますよね。かつては資源の姿を絵として、つまり静的なものとして見ていたのですが、今回は、動きや人が発するエネルギーみたいなものも評価に入ってきたことが特徴的なことではないかと思います。

多様性

林　私は日本の美しさは、繊細さと季節感にあると思います。明治時代に志賀重昂（しがしげたか）が書いた『日本風景論』では日本の特徴を四点にまとめ、それらが日本の美しさを醸し出していると論じています。

一つ目は気候です。日本の沿岸には寒流と暖流の両方が流れており、また大陸の東側に位置していることなどから気候に多様性があることです。二つ目は空気中に水蒸気が大量に含まれるため、それによって森林やコケの美しさなどが作られる。三つ目が火山で、四つ目が急流です。

こうして見ていくと、今回の本にもこの四つの要素がいろいろな形で表れています。

日比野　日本人は漢字から平仮名を作りましたが、そういう応用力や寛容性は、優しく包み込むような日本の風土や自然が作り上げたのではないかと思います。日本人は自然に触れ、そこから真の美しさや神を感じるといった生き方をしてきており、そのことが今の日本の文化を作り上げているとも言えます。自然に神が宿っているという考え方がずっと息づいているように思いますね。

寺崎　風景が日本人の世界観を作り上げているということですね。

日比野　二十年ほど前に書かれたサミュエル・ハンティントンの『文明の衝突』という本を最近読み返したんですが、この本には世界に西欧・イスラム・中国など七つの文明があると書かれています。日本も千年以上にわたって独特の文化を形成しており、それは「日本文明」という一つの文明であると言っているんですね。今回作った本はある意味、日本文明の集大成ではないかと私は思っています。

志賀　日本列島は地理的には南北に長いのですが、その中にあって文明が均一的な国というのは世界でも珍しいのではないでしょうか。しかし、一方ではそれぞれの地域のローカリティも結構強いところもある。

日比野　おっしゃる通りで、日本は文明としては統一していながら、同時にローカリティも大事にしていますよね。蓮如上人が言った「ばらばらで一緒」という言葉によく表されています。そういう日本文明の特色というべきものが、この本では実にうまく表現されていると思います。

日比野健委員

いかに日本の自然や文化がオンリーワンかということがわかると思いましたね。

志賀　日本の風景は宗教性も感じさせますね。那智の滝も、青岸渡寺との組み合わせで考えると世界に冠たる風景だと思います。その裏側には、先ほど日比野さんがおっしゃったように日本人の人生観や世界観があると言えますね。

林　自然の美しさに心を打たれて、ここには何か違うものがあると思うわけです。那智の滝もそうですね。美しい滝に引き付けられて、死後の世界を体験しようとそこに人々が信仰を見いだしたわけですから。

日比野　祭りの写真も音が聞こえてくるようなんだけれど、同時に止まっていて音がないんですね。静と動が矛盾なく共存しているというのも、日本ならではかもしれません。

志賀　そういう意味で、伊勢神宮の式年遷宮の写真は素晴らしかったですね。あの写真こそ、全てを象徴していると思います。たくさんの人がいて、あれだけ動きがあって音も感じられるのに、静けさがありますよね。まさにこれが日本だなと感じました。

式年遷宮

「風光」

楓　今回のこの本はタイトルに「風光」という言葉を使っていますよね。

「風土」「風景」「風」と、観光の語源でもある「国の光を観る」の「光」で「風光」ですね。まさに、「光を探しましょう」ということで、とてもいい表現だと思います。

それは自然だけではなく生活の部分についても言えて、さんさんと光が当たっているのではなく、ちょっとした光が当たっているところに人の暮らしがあり、人の面白さや歴史の集積があると。この本では、さまざまな「日本の光」を表すことができたのではないかなと思います。

志賀　当財団のスタッフにいくつかタイトル候補を出してもらったんですが、その中にこの言葉があって、「これがいい」ということになりました。風光というのは風土であり、光であり、影であり、全てを表現していると思います。

ただ明るいだけではなく、光があるから影が強調されるわけですね。日本の風景では陰影が重要で、それが柔らかさを作り出したり、自然の厳しさにもつながります。我々はその中で暮らし、物事を考えてきたわけで、日本の観光資源は光と影が表裏一体であると言えます。風光という表現には、光と陰影の両面を表していると思いますね。

日比野　風光という言葉は、瞬間的なイメージもあって、マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』の世界に通じますよね。もう戻らないこの一瞬の光と風、温度、そういう感覚がこの言葉には込められていて。ほんの一瞬の美しさを感じる繊細さですね。

志賀　私がもう一つ、風光という言葉に感じるのは、雰囲気や空気感ですね。単に空気が動くだけではなく、空気そのもののあり方も表している。この一瞬のこの雰囲気の中にいる、と体感できるものですよね。

日比野　「風光明媚」ではなく、「風光」だからいいんですよ。

楓　本当にそうですね。この二文字の中に、とても多くのものを含んでいると思います。

文化の継承

寺崎　前回の資源評価研究の際には、歴史景観や地域景観という資源種別で取りまとめていたものを再整理し、新たに郷土景観という種別を設けました。その種別の資源として、水田の風景が二カ所入っています。いずれも前に発行した『美しき日本』には入っていなかった資源です。

越後湯沢でほくほく線に乗り換え、車窓に広がる水田を眺めるのが好きです。揺れる苗、風の通り道が見えます。水面に反射する光。季節によって、絵が違うんですね。観光資源としては特に名もない場所なんですが、旅の途中で目にしたこのような情景は強く印象に残ります。ここではないのですが、郷土景観として農業景観が二カ所入っています。いずれも、前に発行した『美しき日本』にはなかった資源です。

林　そういう資源を入れていこうという議論は以前からありましたね。場所を特定するのがなかなか難しいですが、農業景観で素晴らしいところはたくさんあると思います。特徴的な棚田をA級として選びました。

志賀　棚田というのは別に日本だけのものではなく、モンスーン地帯などどこでもありますよね。でも、日本の棚田にはバリ島などの棚田にはない繊細さがあり、まさに風光の違いみたいなものがこの写真集には明確に表れていると思います。

歴史的に見ると、日本の稲作文化というのは棚田とともにあって、日本の伝統的な農業技術の出発点のひとつでもあるわけです。そうした風景が日本の景観として評価されて、観光資源となることは素晴らしいことだと思います。

楓　白川郷の写真ですが、ただ合掌造りの家だけを写しているのではなく、手前に黄色く色づいた田んぼが写っているんですね。その奥に田んぼを耕すための家があり、上の方で蚕を飼っている。そうした生活感をきちんと表していることが大事だと思います。

志賀　これは意味がある写真ですね。日本の豊かさを表していると思います。今、古い町並みを昔の姿のまま保全はしているけれど、完全にお土産物屋さん街になってしまっているところもあります。

周囲から隔絶され、通過型の観光

地と化していて、いわば資源を消費してしまっているんですね。日本人の生活観や人生観を表した町並みだからいいと言えば言うほど、資源として消耗していってしまうのではないかという危惧を覚えます。

寺崎　伝統的な文化や生活の継承に観光を活用することがよくあります。しかしながら、経済的メリットのみが強調されているような観光地を、今後どうしていけばいいのかという問題はありますね。

林　逆のパターンもあります。歴史的、文化的に意義がある建物だけど、そのままでは経済的に成り立たず老朽化が進み、見るに耐えられなくなる。バランスの問題だと思いますね。

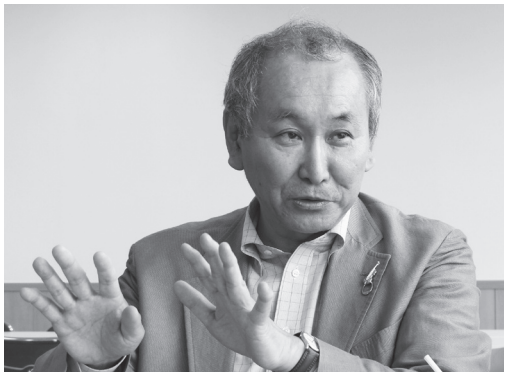
志賀　白川郷などに求められるのは、そのバランスでしょうね。まさに観光資源の利用のあり方を問われていると思います。

寺崎　そういう意味では、今回の評価の中で、人文資源について論議する時間が長かったような気がします。

志賀　以前、中国の麗江古城を訪れたことがあります。もともとここは地元の少数部族の人たちの生活を守るために土産物屋があったのですが、漢民族の資本が入り、少数民族の人たちは郊外に移り住み、そこで民族衣装を着ているのは、漢民族に雇われた人という形になってしまっていて。

楓　一種のテーマパークになってしまっているんですね。

志賀　そうなんです。そういう流れをどこで止めるかという線の引きどころが難しいと思いますね。経済利得への指向はなかなか食い止められないけれど、一定の指標づくりの議論に地域が取り組んでいくことがすごく重要だと思いますね。地域で共通の目標を持ち、あるレベルでバランスを取るといった議論をしていかないと、麗江古城のように本来の担い手である人によって地域文化が継承されなくなってしまいますから。


志賀典人委員長

寺崎　地域の伝統芸能やお祭りなどを継承していくために、観光を活用することがよくあります。ただ、お祭りがイベント化しているようで、複雑な心境になりますね。

林　私がバランスのいいと思うお祭りは「長崎くんち」です。ずっと伝統的に続いていますが、一つの町に順番が回ってくるのは七年に一度なので、待ち遠しい気持ちが続くことにつながることと、負担が過大にならないこと。また、大人と子どもがセットになって取り組むので、子どもたちにも演（だ）し物の責任があるわけです。

　彼らは大人の演し物を見て「かっこいい、大きくなったら自分もこういうのがやりたい」と思い、そういう思いがうまく循環しているんですね。それを外から見に来て、地域にお金が落ちるようにもなっています。

　お祭りが本来の神事から人に見せることが目的になっているケースも多いですが、ある程度はやむを得ないのではないかと思います。見られることで生きがいを感じることもあるし、自分たちだけでやっていても継続しないという問題もありますから。

時間とともに

寺崎　前回の『美しき日本』から『美しき日本　旅の風光』の出版に至るこの十五年間の変化の一つとして、日本を訪れる外国人の増加が挙げられます。これにより、日本にどういう影響があったと思われますか。

林　日本の良さの再発見でしょうね。我々が当たり前と思っていたものの良さを、外国人に気づかされる部分がたくさんあるのではないでしょうか。浅草にしても、雷門の写真を撮りまくるという感覚は我々にはなかったし、最近では多くの人が行き交う渋谷のスクランブル交差点が、外国人観光客には面白いと人気だそうです。我々の感覚では気づかないもの、ごく当たり前のものでも、外からの視点で見ると面白いものが随分

あるのではないかと思います。

楓　季節感の再発見もありますね。今までは外国人が来るのは桜のシーズンが多かったのですが、雪や紅葉シーズンにも来る人が増えるなど、日本の楽しみ方も広がりを見せています。日本人の旅行の仕方に、より近づいているんじゃないでしょうか。

寺崎　日本人が旅行に求めるもの、旅行の仕方も変わってきているのでしょうか。

日比野　たくさんの外国人が日本を旅している姿を目にすることで、日本人の意識も変わりつつあると思いますよ。

志賀　テレビ番組で、日本に来た外国人がある海岸にたどり着き「どこにも行きたくない、ここにいたい」と、三日間くらい何もしないでじっとしているという場面を見ました。そういう旅の仕方を今までの日本人はあまりしてこなかったけれど、これが本来の旅かもしれないなと思いましたね。そういう旅に日本人も学んでいかないと、どうしても観光地を消費してしまうわけです。

滞在型のの観光客がもっと増えれば、今までとは全然違った観光地づくりができると思いますね。そうすると地域も活性化すると思いますし。

林　時間軸というのは大事で、一定の時間をかけて滞在することでその場所の良さが詳細に分かってきます。こうした観光地やリゾートがもっと出てきてほしいですね。今私たちがいる浄土ヶ浜のようなところも、短時間で通過してしまうとかえって魅力が見えなくなってしまうと思います。

志賀　先日、秋田内陸縦貫鉄道に角館から乗りました。すると、同乗していた台湾人二十数名のグループが阿仁合（あにあい）という駅で途中下車したのですが、どこを訪ねたかというと、この駅に隣接する公園の川沿いにある桜並木だったようです。角館はすでに散り際だったこともあって、こちらはちょうど満開の時期だったので、訪ねてきたとのことでした。

ここの桜は二十年前に植えられて、樹勢も強く、最高の状態の花盛りでしたが、残念ながら日本人観光客は全くおらず、混雑する角館と対照的でした。そこに目を付けた台湾人観光客がいるということは、これからのインバウンド観光や日本人のこれまでの観光のあり方を問うものですね。

楓　岡山県の英田（あいだ）では若い人たちが千枚田の復活に取り組んでいて、田植えのシーズンなどには関西から人が来るようになり、農業観光が成り立つようになってきています。そういう新しいことに取り組む人たちをどう応援できるかという課題もありますね。

価値観の変化

日比野　日本人の旅も変化しつつありますね。ＪＴＢが新しく作ったヨーロッパ旅行商品のなかで、人気が高いのは、「私だけの旅・パリ一〇日間」というツアーで、パリとその郊外をゆっくりきめ細かく巡るという内容です。「こういう商品が欲しかった」と、申し込みが千人を超えています。かつての物見遊山的な周遊旅行から、日本人の旅も様変わりして、成熟化してきているなと感じます。

寺崎　旅の成熟化というのは、具体的にはどのような状態でしょうか。

日比野　一言で言えば自分の意思を明確にし、好き嫌いを判断できるということでしょうね。例えばまち歩きをしていて道端で売っている花を買ったり、屋台で何か食べたり、ニューヨークの蚤（のみ）の市で掘り出し物を探したり、気の向くまま思い思いに旅を楽しめるようになってきたと言えます。

寺崎　一人ひとりにとって固有の旅の価値があり、それが行動に結びついていく状況の中で、ある特定の目利きが観光資源を選定しまとめたこの本は、時代に逆行しているようにも思えます。

寺崎竜雄委員

日比野　そうではない。この本には多様性が満載されていますよ。外国の人たちに、この本を見せて「ミシュランのガイドブックなどと比べてどうか？」とヒアリングしてみたいですね。専門家、一般の日本人、外国人の視点はそれぞれ違うわけで、その差について考えるのもいいかもしれません。

楓　旅の成熟化という話で言えば、旅先にいかにたくさん接点を作れるかも重要ですよね。多く接点を作った分、旅も楽しくなりますから。課題は、その接点作りを地域でどうやっていくかということでしょうね。

寺崎　この本に載っている写真も、一番いい時期に一番いい光があたっている状態を表現していますが、そういう時期は一般の旅行者にはなかなか分からないわけです。地域の方が「この時期に来てください」とか「もう一泊して、この時間帯に見てください」と、訪れる人たちに言えるような仕組みも必要だと思います。

楓　そういう意味で、解説する役割というのは大事ですね。先日、特A級資源の岩手県北山崎を漁師さんの船で回りました。単に景観を説明するだけではなく、震災経験も含め、ご本人の体験の話をいろいろ聞くことができ、地域への興味がより深まりました。

林　昨年訪れた桂離宮では、ガイドの方が宮内庁職員だったのですが、本当に公務員かと思うくらい説明がうまくて、その人いわく「一番いい季節は今ではなくて冬だ」と。その風景を言葉で表現してくれるんですね。想像力を非常にかき立てられました。

日比野　で、私が修学院離宮を訪れたときについた宮内庁のガイドさんはちょっとぶっきらぼうな方でしたが、何かガイドの基準があるのかと聞いたら「みんなばらばらだ」とおっしゃっていました。自分の興味に応じて好き勝手にやっていますということでした。でも、外国人にはその方が受けるかもしれないですね。

林　皆、同じではないというのも面白いですね。

志賀　それも大事なことですよね。ガイドって結局個性ですから。先日ある旅行先で、内装が白木の凝った造りの蔵があって、そこのご主人がなぜ白木がいいか、いかに手入れが大変か、「でも漆なんて塗ったら駄目だ」みたいなことを延々と説明してくれるんですね。その後、地元の老舗と呼ばれる店に行ったら、内壁に漆をたっぷり塗っているんです。ああ、こういうことかと。彼としてのプライドと誇りがあったんですね。

日比野　その人にしか語れないこと。これもオンリーワンですよね。

日本人のアイデンティティ

日比野　二〇五〇年になったら、世界中の観光客が今の三倍になると言われています。その頃には訪日外国人が三千万人に達するのは間違いありません。世界中に観光客が溢（あふ）れる事態が迫っているわけで、これは世界的な大テーマだと思います。

　それがいいか悪いかということではなく、大変なことになることは明らかです。そのときに美しき日本をどうやって守るかという問題もさらにクローズアップされると思います。

寺崎　それほど多くの外国の方が増えるとどのような状況になるでしょうか。

日比野　欧米人の旅行の仕方はかなり成熟してきて、五箇山や屋久島などへ足を延ばす人も増えています。日本人はもちろん、アジアの人たちの旅も成熟化するのがかなり早いのではないかと思います。

　物見遊山の旅から目的を持った旅をする人が増え、興味が分散化している中、風景だけでなく、人の営みや文化など、さまざまな角度から日本の魅力を感じていただけると思いますね。

楓　例えば五箇山に行ったら合掌造りを見るだけではなく、紙すきの職人さんを訪ねたり、実際に紙すきを体験してみたり、ひもで縛った硬い豆腐を食べてみる面白さなどがありますね。今回の本の中では、伝統工芸という切り口が打ち出せなかったのですが、旅先で手づくりのものに出会う楽しさもあるはずです。

日比野　有田焼の窯元に行ったり、栃木県の湯西川温泉へ昔話を聞きに行く外国人観光客も増えているそ

うです。自然よりむしろ、生活や人に注目が集まっていると言えます。

楓　日本人が手でいろいろなものを作り上げている姿に外国の人は感動したり、「なぜこんなものができるの」とびっくりするのではないでしょうか。その接点を広げていくことによって、特A級やA級といった評価基準とはまた違う評価による観光資源が見いだせるのではないでしょうか。

例えば、有田焼もちょっと絵付け体験をしてみることにより、どうしてああいうデザインがこの土地で生まれたのかという点に、外国人の関心が広がると思います。人の技ですよね。

林　一方でそういう観光資源は選ぶのがなかなか難しく、観光対象としての魅力に永続性があるかという問題もあります。場所にかかわらず人の技をピックアップするのがいいという議論と、その技が息づく場所も特定した方がいいという議論があるでしょうし。

日比野　例えば、盆栽というのも今回の本には入っていませんが、埼玉県の大宮が有名ですね。盆栽の世界もすごく深くて、まさに小宇宙ですよ。外国人の関心が高いし、ああいうものは世界に他にないという意味では、次の観光資源としての可能性があると言えます。

寺崎　このようなことは、十五年前の評価作業のときには話題になりませんでした。旅行者の意識と行動は着実に変化しているのですね。今回はA級と特A級の観光資源を選定しましたが、今まで皆さんからいろいろな具体例が出たように、従来とはまた異なる基準で評価されるべき資源もまだまだあると思います。

優劣はないので、「準」という表現はちょっと違うかもしれませんが、今後はそうした「準A級的」な資源をうまく定義していかなければなりません。

志賀　今回のA級や特A級では受けとめられなかったけれど、別の観点から見て可能性のある資源をリストアップする作業は必要かもしれませんね。そうすると、これまでなかなかビジネスベースに乗れなかった着地型旅行などのあり方も変わってくるかもしれません。

日比野　旅の成熟化とともにアピール力がある資源として、A級や特A級との差が狭まる予感がしますね。人によってはA級や特A級より、準A級に価値を見いだす人もいるでしょう。むしろ、我々の評価軸を広げて、議論をオープンにしないといけない。いずれにしても、この仕事は日本人のアイデンティティへの気づきに、大きな貢献をしたと思います。ですから、さらに発展的に継続させていく必要があります。それが、公益財団法人日本交通公社の使命です。

寺崎　早くも、次の宿題が見えてきました。新しい価値への気づき、それを表現する資源の抽出、さらには資源の持続的な利用のあり方、そして観光の力など、観光研究者はさらに意欲的に多くの研究課題に取り組まなければなりませんね。本日は、多岐にわたるお話をどうもありがとうございました。

（二〇一四年五月十三日・岩手県宮古市浄土ヶ浜にて）

取材協力　㈱REGION　井上　理江

掲載写真「奥入瀬渓流」「式年遷宮」
出典：JTBパブリッシング
『美しき日本　旅の風光』

楓　千里（かえで　ちさと）
（株）JTBパブリッシング執行役員ソリューション事業本部副本部長兼会員サービス事業部長。学習院大学法学部卒業後（株）日本交通公社入社、出版事業局配属。海外ガイドブック、月刊『るるぶ』編集部を経て、一九九九年から月刊『旅』編集長。二〇〇四年（株）JTBパブリッシング設立と同時に広告部長、二〇〇九年執行役員法人事業部長を経て、二〇一一年から現職。国土交通省「小笠原諸島振興開発審議会」、総務省「地域の元気創造有識者会議」委員等。

林　清（はやし　きよし）
立命館アジア太平洋大学（二〇〇八年～）、高崎経済大学（二〇一一年～）、横浜商科大学（二〇一二年～）非常勤講師。一九七一年東京工業大学工学部社会工学科卒業。同年、（財）日本交通公社入社。一九七七年（株）札幌リゾート開発公社出向、札幌国際スキー場開発事業に携わる。一九七九年（財）日本交通公社復帰。二〇〇三年常務理事を経て、現職。専門分野は観光計画・旅行動向。主な著書に、『旅行業界』（共著、教育社、一九九一）、『観光読本』（共著、東洋経済新報社、二〇〇四）

日比野　健（ひびの　けん）
（株）JTB総合研究所代表取締役社長。一九七四年に大阪大学文学部を卒業し、（株）日本交通公社（現：（株）ジェイティービー）に入社。団体旅行京都支店長、関西営業本部副本部長を歴任。二〇〇二年取締役経営企画部長、二〇〇三年（株）JTBビジネストラベルソリューションズ代表取締役社長、二〇〇八年（株）ジェイティービー常務取締役旅行事業本部長、二〇一〇年（株）JTB西日本代表取締役社長を経て、二〇一二年六月から（株）ジェイティービー代表取締役専務、二〇一二年六月から現職。